二十一

柏木ハ若菜と同としの春の末より源氏四十八歳の春より秋まで也
事みえさりしゆへ源氏に 柏木の衛門督の事
人をもすへき帝のことを思ひ河内本のえらひかえて此枚さし
をしあり
衛門の督の君 柏木の事也 かくあやしき女三宮を思て柏木の
わつらひ 引うつりたる源氏四十八歳の春の末より
しゆへて思ひて書給ふ也
もとより物おもひけるにや 柏木の父母の事 柏木のこの事を
行道 思ひてまつりをせむとするに 柏木のわつらひ
女三宮にのみつき思ひしを [illegible]
[illegible]

慶應義塾図書館蔵

寶 同

しけさかりしかとも 柳本の人〻仰事とも今あらくしとも

こんの御事しおほせしかとも申なるとし

寶みやけ亡し 先一ハ廿三文のはしまるとのこる事も仰せ

まゐらせられ候ハさせ給ふへくさふらふ 筆之文を仰事あらし

わか心文字をたつねんとのみにしおほえし 一段と珍しの事なり

候ともけし年あれハあら式筆とまうし候ことん

かくての帯に引文字の移りかハれハ 給ふてかくての世をもあつかはれ

おやちの〻柳本の父母とも不若ちろんのんろつれ

給ひまう 引清くふかき世を心さしなんたよせ给ふにハよつちられ

とりきかうし おほし入れそかくあらかなれハおほよ人をいうをこれそ

むかしの事おほれハおもむきかたらし 音に一つくてし侍りしかんし

柳営しの一こゝろけす 廿三文へんとけかへの事

これらかふふかれハ清くきくしことく神んしろしいたさ

二なんとゆゑにふ そあかし仰事も帝世しう此名執に立んと至ふる

帝とそふてし

これしませのしるしも莫御地の時ハ張を五年の松なりけり 前

御の御かれなをしてかくあらす人の気をえて 世にハ廿三文御事

けんわのしいんし一文安の力をとらしても事ハひかりをあしいとかれ給ふ

廿三ハ念のやれとて 御人とともにけせをあるへんなうしくせけり

をかし 御家を申さしむ 気事ハしほ人ますも あるなをあて心といふ

さらうもあるしちからかつし候ハ〻の 給ふ人と

もちらかし 閑処 こてあまんおこと給ふ 一十あく

ろし 御 おやかへ 祈り 依りた不

さうしたく六 しし心にかけて

いはましあらねとも柏木の病のとき

しらぬやうし女三宮ハ柏木の文をやり給ふすまし

なにくれと如ふくし気色ハ柏木より女三の御心

いさしうけみけいし柏木のものかりしまし

ハいそし柏木の名へ女三宮へほうしさへ見へとみえて

さかりともおりしわかのまんとも

めくりあふてのさかし女三宮の柏木よりたえみの御返し

御息所もこうし落葉とて柏木女三宮の中なり

ころもくらしてかくる也へし

ひとへきもらし落葉柏木の御かたり也

さりならぬてとく柏木のいはれのつかいとられたる也

けふさくいはまし落葉の御かたり柏木の事也

それにつけても女三宮の御返りなと見えてかしせさし

くいなのあはもとそよろ御うしなし

さてやうさに御いくしてにほひそ女三宮の御心

まつし昔の人のしまふとをしもしるの事のかん

きこえさせん人へそれハおけしと柏木の事とをみてあるへしの事

まうくものいまうし柏木の心よりも女三宮にも御ねをて

かくまうけうし小侍従世三宮しをよして柏木へいはせ

かつらき山より或物語云役行者小角仍葛城山相傳テ云能役鬼神

汲水採薪若不用命即以呪縛之云々七十八代天皇代人之事には

かくらいハ柏木の文おもしろし

なからへ世こそ人のなとかなはさ ぬせきさしも

さこしは思ふに　なかくたのミし柏木のあとに　まほたに　立山への路に
じき人もらしおく所下翔命すかとみな緒かりけるも重し
まずしは金母しくしきへ安清濁をあまず目をうつさせん
くわしる人と云へるはは人見くゝはせてしまんとおもし
さんとおもくしさるかや
かの君のえのし柏木の伝しに対しての題ともかくの名前ましきとは
世継物語に時平公三男敦忠中納言をかちとういとそ附善師信と
またけるに十二の時のうちにくしひらき大将に逢てやらむもつそのと
かれしすそくゆるくるのとしまて天神九膳病の人といふ
天慶六年三月七日薨　廿八　四十四年正五位しかとて
御物語とかくしたらふて　柏木のこと

とるハミヲヽ香のみか父わらくハ小納言に元行の女家あらし
うちやたて　父の子か六禅尾
じいしる事と枕取し柏木乃父とおもとつひ段といへるも
かのおもてとえもありしさもの傷さめ　弥者寺よむつひ結んか
れてつ語し御傷は伺之排に小納言柏木のあはく
きりせ定まりし業成アあしとあれい当ちの想ひ申しせうのいま者ろん
為へ残月よりろれんと
雨を寒けはさし柏木のん女こえ
むかしの世をもし保存柏結より類
栗しけりしこえかん　業平二字序に家道の事も
まさえしくし此の中とへ忠
まさん常漏之

かくれ給ひ[illegible]

[illegible]

かゝるの[illegible]と柏木のかくし[illegible]

給ひそめ[illegible]

[illegible]のかゝ[illegible]柏木の[illegible]

むかし[illegible]

[illegible]

[illegible]柏木の[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]柏木[illegible]

[illegible]

[illegible]柏木の[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]

[illegible]女三宮の[illegible]

[illegible]薫[illegible]妾[illegible]

[illegible]柏木の[illegible]女三宮[illegible]

[illegible]柏木[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]の[illegible]

柏木の病[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]柏木の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]柏木[illegible]

[illegible]

世尊ハ [illegible] 秋の紅葉 [illegible]

[illegible] 世三の宮 [illegible]

[illegible] 女三の宮の [illegible] 柏木 [illegible]

[illegible] 柏木 [illegible]

[illegible] 女三の宮 [illegible] 柏木 [illegible]

[illegible] 柏木の [illegible]

蒼頡観鳥跡作文字史記ニ

[illegible] 柏木の [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 柏木の [illegible]

[illegible] 柏木の [illegible]

[illegible] 産ノ気之 [illegible]

[illegible] 女三の宮 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible] 柏木 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible] 柏木の [illegible]
[illegible]
[illegible]
夕日の [illegible] 中宮 [illegible]
[illegible] 中宮 [illegible] 太政大臣 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]事也しるし[illegible]やとりし[illegible]
[illegible]源氏の[illegible]廿三の年[illegible]
おはしましける[illegible]源氏の[illegible]
思ふも若君[illegible]
廿三の春[illegible]
かへりきて[illegible]廿三の[illegible]
すこし思ひつゞけ給ふ[illegible]
やと思給ふ
よろこひし須磨の春[illegible]廿三の年[illegible]
廿の人の[illegible]とり源氏の御[illegible]
[illegible]あまり[illegible]廿六[illegible]

[illegible]須磨の浦
源氏の[illegible]
[illegible]也[illegible]
[illegible]
[illegible]廿三[illegible]源氏[illegible]
[illegible]源氏の[illegible]
[illegible]
[illegible]廿三須磨の[illegible]
[illegible]須磨の[illegible]
[illegible]廿三[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 有三 朱雀院の御悩

ありしよりも[illegible]

たゝの[illegible]し[illegible]

[illegible]朱雀院の[illegible]

[illegible]の[illegible]

すこ[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]のゝ[illegible]朱雀院[illegible]

[illegible]世三[illegible]朱雀院の[illegible]

[illegible]の[illegible]朱雀院の[illegible]利口の[illegible]

[illegible]女三[illegible]

[illegible]朱雀院の[illegible]

慎むの事[illegible]

[illegible]朱雀院の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]皆朱雀院の[illegible]

家の[illegible]

[illegible]朱雀院の[illegible]

[illegible]世[illegible]

[illegible]朱雀院の[illegible]

[illegible]世三[illegible]

[illegible]

菩薩[illegible]

[illegible]衆生[illegible]

[illegible]菩薩[illegible]

[illegible]

二六

一 声なんとくれし好色家親も家も追れ小袖幾度嫉妬女
の邪氣ともいふ事なり女乳児へいへかくして後に其身に
もろさの内邪氣人まよはされ其れにしも
さうちてもいろうよし見てもちは しくして人
唯あはれしくも此の心女三をも思ひけく
ひしも なりし女三を庭にて見しやうてかしこまらく
文すうしし女三の事く まうかくて女三の文めんくの
見せたるも文の返しもかたるもいはぬもしすくのえ
ての事をし女三の為に用かまし
女三も見て心よし女文は小侍従のくに女三の
あの文をもおとしたは柏木の文をのるたこのへきよい今一度
中納言して文をもてかへのぬ

女三宮へも 柏木のん おもひかけ入かくし見てはを
せん おもふにも 源氏のゆへし 紛れなとも
是れもは女三宮の事をし 薫はの母也 柏木の おはしの
ある事をし也 薫大将の母をは柏木の心ゆゑにかへ父のおもは
かくの給ふりてし
後にもは女三し朱雀院もおとの今はの給ふけり 紛
云んくえも柏木のんく
女三宮の事をし女三の宮は朱雀院の女三の宮の事也
されて薫をは柏木とゆかりてひやもとく見ゆる 柏木
されて見せてくし 柏木の心の薫をかそれなれてくく
夕霧にかけりし不悲歎く 女三の宮の
夕霧に 薫を

一　寛平以前　是ハ柿本紀僧正也云々
是ハまことしからぬ説也　紀僧正をかきのもとゝいへる事あり
柿本の紀ハ紀納言のおとゝゝ云々　柿本の名乃　跡の事
かくの說とく
其の子ハ柿本の名乃ありて兄弟なるとおもへる也
義といとく　其のうち紀ハ紀僧正のおとゝの内此人の事也
三位ハ　御幸の時も柿本也　二說とも
権大納言　柿本の紀乃ミ子なり　此說信之
よ紀ハあやしい　禁中にも大納言の位ハ今一度ある也
又ハ信任をす　說とも
文元　同しく内人の紀の名乗もとも說とも
三　申しても柿本大納言の名乗を申しける
ゆへもとハあやしからぬ柿本の紀乃兄弟なりとも
柿本なりとも
此おほせの事なり　大納言し文徳天皇の御子惟喬親王の母也
文徳天皇の御時　柿本紀僧正此門に参りて御祈を申
又其外をはらはせて　高祖文徳の後のみかとゝ
下しとゝのへい　柿本の紀又おもしろしことハ文徳天皇の御子
以て御祈をいたされて　恵亮和尚御事あれハこそ
三つの御子の御事　二の宮の事なりともいへるとそ
僧なと云ハし　祈祷の僧なるへし
是よりいてゝ　柿本紀僧正ハ文徳天皇より御めの御事とも
又柿本の名乗ハ文徳の御子
紀ハ紀の事也　権大納言の事　紀の御事也
年ハ　あまりもけさの文徳の御事

いとゝ
うちとけぬ〳〵柏木の[illegible]
[illegible]いり〳〵柏木より[illegible]とことて[illegible]
おほ[illegible]のおほ[illegible]柏木の病[illegible]て[illegible]
あはれ[illegible]平性乃[illegible]物之
[illegible]ひり[illegible]之 [illegible]
[illegible]ひ[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]柏木の[illegible]の[illegible]
柏木[illegible]
[illegible]柏木の[illegible]
[illegible]柏木の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]海[illegible]
礼記[illegible]五十[illegible]仕[illegible]五十[illegible]柏木廿五[illegible]
[illegible]
[illegible]柏木の[illegible]微弱[illegible]
[illegible]
[illegible]父母の[illegible]置て[illegible]
[illegible]
[illegible]柏木の[illegible]
[illegible]の事之[illegible]
[illegible]の事
六条[illegible]女三[illegible]之 柏木の[illegible]
[illegible]柏木[illegible]

一書 法蓮しけるはのしゆく

すくすくと柏木北殿とたのみて申し事也

さきにかたりし謡言也 不審に論らせ也 必あとを也

一 定まりつる事は未世のさかりなれはとて 柏木の心より

さくらしゆかさおしをはしいかんてうとの羽也 又に 藤原氏盛と云人

かくしたるのとり柏木と夕霧の見所也

いかさま名人おもふから夕霧羽にまかりて柏木

のんまりくせいの殿しいゆるのこそ事也

病氣とまいのふ地也

ころいさてうし柏木の心羽にて夕霧の申し也

きとおもうことしけれとも道々

今日不知死明日 何故造作安穩無常身 雪山偈

一 柏木夕霧の羽にて事とつる

一 柏木 宿業の事 夕霧をもって申し事也

陰事より朱雀院の事也 柏木心羽

是ハかへりて云也

一 人おもいし柏木の父母也

冷泉院也 冷泉院也 弘徽殿也 柏木と一腹の兄也

此大将と云雲井雁の父也

夕霧の死別を也

薫に女三宮の事也

世皆不牢固 如水沫泡焔 汝等咸應當

下のんぞいとし女三宮へいとしての薫

いふ家にいかにいかに桃園の家なるあるしきかん世尊寺之
世の人思ひよりもなし、あると思ふ絵之事　世尊寺と云
家を所とし前東宮の母大后桃園死去のちハ世をさりしく之所也
桃園ハ小野宮も或説に敦忠のおとゝハ清慎公の御事也　准して出
とおほし給ふ殿天暦の時ハ敦敏少将のおとゝさたしてこそ失所
此ハ小一条太政大臣ハ廉義公の御殿也に似たり
廉義公ハ弁少将右大弁を経所とみえたり　世尊寺と云ハ此の
又ハ敦忠中納言の御所つたへて其所とせる也　さてこそありけれ
此ハおとゝ清慎公の御所なれハ行ける所を世尊寺にもなりけむ
むかしの家
桃園ハ世尊寺の人くの御事にて其所とおもい桃園なり
それしく思ひ給ふ死の所を云ふ也

世尊寺の家ハ則世尊寺　桃園の内なれハ世尊寺をいふ也
御ゆかりのなとせハ少将の桃園の女と世尊寺の御所なりける
生てハいかにしたる生れ給ひしかと[illegible]
御子の生れしかハ世尊寺の御事とて
是ハ五十日の餅なとせし也の尾ニ所そのまいらせ給ふいか
なとおほしけれと
ほとにはかの所にて尾にも御思ひを給ひし所なし也
いかめしういし五十日餅
何五十日餅　大鏡村上天皇誕生五十日の餅まいりて云々
よもすから尾に御給ひ云て後を朱雀と云ひ給ふ
せの御給ひてそれ男子をは世のためにも見へて奉りとそ
ちいさき御事いとしくまゐらせちいさき御方へしおほし
御事ハいかにとしかの御事とそ

二十一
其のいはれハ女三の宮柏木の事とえ見えしもとかれてすゝむ
いふやうしとく源氏の心く宿もきめ
冬てかきたる取てしすれたく鳴べきゝの
くれけなく全躰て大きなると見てなる
とてきくし色ゝくかをてつれうけんの訴え私ち次されて大師
いはゆる冬し上手なる紅梅よりにて文箱紀しりハさハし無後
わ年ばかり父のれハえまされ源氏の紀え尤るねんと
すこしまれかれ紙しけれハさ皆源氏のかんのにかひる宮御めち
冬ことにもいでて年ことの年を渾て年ハ名題の墨れハなれたハすこしこそ
至ことものあけりしおことなへの字なさとく
日をくらしくらきん無沢のなき紀にようり夜
かなをりりし源の筆のそぞ迄者もさてて文ちて名まけすれ

其の申しハ女三の宮柏木の事ハなれもしとかれて
柏木が全てしてる事しれ柏木て柏ハもろる世事をおかしるて我身をとめ
今ハとりて柏木しなるるぶハも尾を歌かわへハ今の日の本ふりとおほしてし世を
てくにゆるて源しをいとハ相てて女三宮きんぞ思ひうりて世をといふさいふ
とそなりしらんとき
今ハいハ三源氏の日今ハ柏木をなまつくふかハ女三宮と思ひ致りて見給ふまじく
なのりけのしらうすと多賀えり
みる面の人し女三宮絞りて源氏れハ物て何事も尽なぬさそしかね
いはそれみ尤をもたかねむねらかに何の名刻もなくたし
つぎて心は其の事やおもりし源の御女三宮とて柏木の事せぞなる
おりしるまりても柏木の事く
てつぎ氏の心れてれし言のいたしの見行かく
ほそすのるきもくし源の者のあかれてまれくにはさけせくそいまや
ゐくとの待行く
かくりすこそかむぞみし源ぞ代行尤徳はりうかの北柳来沢を言ふへ
今宵ぎ年もかくゝのふえのうふ外にハいさのハかあつめ

りける五十八ハ白氏か五十八にて子をまうけたる心也
大将ハ是をきゝて文章のことくおもひなり給ひけるとそ
世のためしにも申中にも此の文をさとりのけるゆへ
こゝろけつゝし生菓ハ帝王に仕へみてなんと
いよいよおもひけり柏木は幼にてなりけるよし
まことに我のとかむへしまことのうちに世俗にまさる所もある
いまたこの世にいひかたし
んくたゝいはれなき故柏木に似給へると也
見る所あるをしりのせけるけにこそとや
五十八をし柏木に似給へるを世をいましめ給ふとて人こそ大事にて
さりとて悲しけりの柏木に似給へると思ひとも給ひ
大くの世の中に柏木の気比ゆへにて其を堂に蔵する
其小思ひて五十八翁方有後静思堪喜亦堪嗟持盃祝願
無他語慎勿頑愚似汝爺　楽天子なくして老年の

今年なりし男子を誕生此事かくれなき事也
とみなさく忍ひておもひてなり給ひし菩提大将を生
すく身を十とせすてたるとある女あり縁語也
是らのちくさし楽天の句を引て柏木の子を下この類の事をいひ
對して爺は似たるなるへしと也呼
楽天は汝の爺似たるなれと作たりは草下也此氏の思ひに柏
木まてに似たるとおもひまへりしと双紙の心一
五十年のよろし柏木の娘也しかるく
さこそあらし源氏の心気年よりて子供まけけるとんやまと人
柏木の子なるへきあらしへと清
あらへしおんなの男ともハ其のかく年ハかくしてんかんと也
大人ハいふへしたゝ源氏の心よ歌をおこなひ人のうたかふ

柏木の衛門ハかゝる人なれと女三宮を見し二の宮には心ふかし
より女三の宮の事ハ心にかゝりしと也　注　已上此のことハ心に似てまいりても此の心ハ忘れかたき也
源氏の我身の事思ひ出したまふにも此のおもひの事ハ二の宮の事にも
て見給ふ心の中ハいかゝ思ひかの女宮の御事をおもふと
おもハれし方也　言葉のおこりハ尽しく思人ハされともおほしてお
かしきとなり
柏木なと也　此のおこりの事也
おもひとよく似る柏木より此の御心を源氏と
思ひ出し給ふより柏木の事此世の事にておもひ出るかな
給ふにもおほしおほしめしてハ見給ふ色にあらハ源氏の心
このおもかけこそはなれ世にかゝる事の思ひを
源氏の思ひ柏木のことき也
はしいハしゝ此の程やしの思ひの事を心にかけつゝおもふへき
又給ひしもはなちて女三の宮の事
たゝ世の中のならひあはれさる此の御心のおもひなきかなしさにもおほしめすに詞
おもひの御心の思ひしなけれ人ハ世にもありかたきものにて思ふ
此のかの程の思ひをはなれて女三にいハれ給ふとそ
思ひはかりし女三の御事也
まいりてもせし源氏の心女三宮をまいりてまいりとそ
いかに思ひすてられし源氏の心女三宮なとも心にかけ給ふ柏木の事なりし
あらハし女三の宮の事なりけれハ心にかけし給ふしと也
柏木の事と女三宮のいとおしみすまゐと也
大将の心いつれもあハれにて思ひなからも是ハ柏木の女三宮
いつれもおもひけるとそ

すうし給ふかくしかなしけに今日はかへさんとおもひけれと
すりうらしけり　女三の宮の尼になり給ひし時の御事也
かたらひ給ふこと
御けしきふかうて　夕霧柏木の兄弟よりも心ことに思ひ給ふ也
女三宮のみ心ち　女三宮尼になりし時の事そめ給ひしと云
いとすゝろにいとつらく　ことに事の違
家の御こゝろはへなと　病気の時の尼になりし也
御心にかなはぬ事とおもほしくなり給ひし夕霧の事
柏木よりことにありし夕霧の御心に柏木のをかしき思ひける
ものまめなる夕霧の思ひ也
いとおもくそ見ゆるかし　柏木の御まかなふ夕霧の思ひなり給ふ
宮上をみ給ひて　いとあはれにおもふ事多し

わかき心の色かはりいよいよかくなりゆく事を恋しとおもひし　丈夫の心
命あまりし女三の御かたにいひやりし　むかしの契とわすれず
心もとなし　柏木の妹也
ありし頃にしのび給ひし事也　大君の御事
よしとひけれと　柏木の兄弟なりしかと
つれなかりけれと　後の世に
中にいとあはれにおもひし事に心をかへしていてあはれ
返さうなりけしとて　不幸を思ひ
あはれなるさまなるをあはれに思ひけるにや
清くなかなかにいたはしけにかくすへし
事にまかせて思し　あはれに思ふ
いよいよむかしの事をおもひしる事

宮の御事なりし一条の宮は柏木の北の方にて女二の宮と申すもかの御かた
にし心をつけて文なと給ひけれと
返しなとはしたまはて[illegible]つれなくおはしけれは御心をつけ
て文給ひし何となく夕霧の大将殿よりさまの御事[illegible]を
おもはれけるのこゝろのうちをしり[illegible]
さてなにかしこの大との[illegible]
柏木のゆかりの人なれは柏木のことゝもをおほしいてゝ
少将の君しのひて大将殿の御ことにそへて申す
さるほとの御ありさま[illegible]きのふけふとおもへともはかなくて
[illegible]夕霧の大将の御事と一条の宮の中[illegible]
[illegible]柏木の兄弟たちもとふらひ一条の宮へまいり
此巻の名をは[illegible]ましきと[illegible]

寄りてあつかひの宮とそ[illegible]申しけるゆへに此の巻の名とす
宮はわつらひ給ふを大将[illegible]
いかにと申されし夕霧の宮をとひての後柏木乃事を
きゝて[illegible]はもし柏木の兄弟もこゝにて夕霧出さし
あまりあはれに[illegible]泣き給ひて[illegible]ぬと
今の[illegible]夕霧の御柏木の少将の事をゆくへ[illegible]
此巻のとめてかへし宮の世をかしこくも命のいとおしきを
あはれとそ

此巻の名は二月から[illegible]月之中[illegible]
[illegible]この[illegible]まゐりて文なとかよはし
[illegible]柏木の父母北の方
[illegible]女二の宮の[illegible]

きこえおほえていへりか夕霧のおもひのほかの事を云歟
世の中のうき事ハ女三宮の事をおもひわひけり給ふと也
あはれなる事かなしけれ夕霧の詞也
物ある事をとはしかり思ひの詞也弁より思ふハ世の理を思ひ
てあつかひ事をあつかへとも それとはしりて也
女二の宮ハ後をゆる世の理也
おほし出て女三宮の歎するにつけてもこの事にあはれ給ふ
まことにおもひしれて歎給ふと也
むかしより柏木の事とおもひやるに給ふ也
おほかたにつけ柏木の夕霧を思ひ云也
ものゝあはれを思ひしりし御息所の御心を夕霧にかくれなく給ふ
女三宮の事を柏木のあはれぬれといひしと也

御息所の御心を知給ひてうちおほせし事なと給ふ
あはれなる事をおほしつゝも女三宮の御心よりて
ひとかたならす思ふ心也
それ御本ハ世をも思ひしり柏木の子を世をそむきてうしなはせ給ふ
見ことなる御息所の心つけハうちみゆる事なるにて人のふかく思ふ事を入
あはれなる事いひしを思ふと
知りぬれとはいかにいひし事とはこれに行事に
心をよく行とも中々にしと
我身の上を何とも後をけてぬか思ふにたへて行なり
身の上をうらみて行し御息所の事をと云也
思ひ出の行心をおほしめして夕霧の心を思ひ給ふ也

[illegible]女二[illegible]

[illegible]光源氏[illegible]

[illegible]夕顔[illegible]

[illegible]事[illegible]

[illegible]

夕顔[illegible]夕顔[illegible]

[illegible]柏木[illegible]云

[illegible]世[illegible]

事[illegible]　二十二年　[illegible]　二十三年

[illegible]一[illegible]記

大[illegible]事[illegible]

[illegible]事[illegible]

[illegible]道心[illegible]

[illegible]

[illegible]夕顔[illegible]

[illegible]中庸[illegible]道[illegible]思

[illegible]

[illegible]夕顔[illegible]

[illegible]柏木[illegible]夕顔[illegible]

[illegible]

[illegible]云[illegible]

[illegible]夕顔[illegible]一[illegible]

[illegible]

[illegible]

わかやとハたゝ夕かほの女の住家ニもあらすしてゆかりなくと也
集にいふすかたなり夕かほの女をおもひかけ給ふよし見るへし（かくしたまひし）
にほけと云ことうたかひなき也（旧あんしゆしふをまちて見るへし）
此うたは花のいろにうつりにけりなといふ心より命あらん
作者の心ハ花にあかすとハいへと命を惜命あらんこそ
心をかしくてもての行（又あらんとはつゆもしらす）
此のあかさりし命をも知る桜の花をめてゝ柏木ハ
柏木死去之夕かほの事也（此所にて也）
三条宮の御方にへたゝりし当時の目にふれとハ目に
源氏の事をも世にはなれし事をおもひしらぬとハ柏
木死後を忍ひおもひ此よをいつくしミ都を旅にしたる
花をと柏木ハ喩ふなり
咲前とうかひて方の色そ
ちるあとてもそれをたとへて我旧きをみるへし

いかゝなりし事の事を夕かほのくわしく也ゆゑに死し也
又しめやかなるゆゑかくしてかの夕かほのくみ給へ
あかまてしるしたる事をみて夕かほをよみし心にて行く
此花よ此のほのかなる也といへる
歌の事よりも哥の心と歌の事をよく心をおもふ也
此哥ことに此心をとけたるの事をしるし
まつ心ある事とハ歌の表にあらはしてみへしとなり
かの歌の意ハ心をとめ又ひとりしかるへし
思ひそめつらし夕かほの心を思ひよそへてみる也
かハらぬ世のよ柏木と夕かほとの事をみるへし
かくなれハおもひそめて
読し世のちかしと哥と柏木の事を知る行なり

一 葵上にハ御息所のいきすたまの事を記しはへく　書出しとし此の事人
にむつかしく御息所の方をたち、なん也ア行く
其ハ比にハよりし源氏ハハつより女三にけ柳のあやにの事　云有
はなれ人のかへ　夕かほの人
夏のはつこえし　葵上の事をもちしの物
なへすとかりし女かたふくる心をすくなきよりかへ行して
思ひの事なるし男ふかくひあると之ちかくしつ好むと柳木の事を　云
あひとのむへへきし与あふるの事又柏木の後をきさめへ之
かりあさき思ひし柳木をふかく然ハ後のも女三をよくきすくちかくひ
ふき丁明の事なりし女の事なりし柏木あさ夕霧をしつてと之
あふれぬきぬく夕霧のふかいし家に花をもすうしと
あやめ源氏之　女三宮の源氏をまし云てのか女のひとへめとし

かへけり　夕霧の事ハ定めしへの柏木にいて　云ふかめなかくし
一 かのかたりよし女三宮の後をと　ちかく之
柏木の後の霧を人にしよし家　源氏ハ後の事をとて人ノ心を気性と気の
ことすゞ事ゆの後之
かつ後を柏のあすり事し夕霧の女三宮をいふへきの心之
き夕霧にふかきふとは柏のはしと之
そのめしゆし女宮ハ紅梅のたとへきてのへきよと　記ノ流
夕霧さて女三所を心ちかへ後ちゆ所をハ柏木の事
昔かつて一柏木の事ハなる
小字をはさるゆえに後ハ夕霧の小宮と女三を打てなりも所
のはかの心ハ云なく夕霧も柏木のこといひとめかなとく
然ハ人の事を心ちりし　女三宮の下と記して行く
すへ行なれ候之

いはけなくなりにしをとこそなけかしけれ
ものしたまひしをりに　前栽には柏木のこ
一条の宮をとふらひ給ふ時に前栽の柏木のはかなけれは
いよいよなけく御息所の御様へ一条の宮家よりのことなと同前
すけなくて柏木共に落葉宮への事　御息所の思ひ也
とや落葉宮をも思ひ遣事
なくさめかねつゝしり御息所の御恨をさまかへて海とも成ぬへき
またさもなくて夕霧の御心には入道宮の御方に
いと哀也　夕霧心
あやしき落葉宮の事を夕霧文にはかりことに
たゝおさへ

思ひたまへなすへく
かへての色けしからぬ夕霧の心に庭の木を見て柏木のこと
思ひし　柏木とおもふ也
枝さしかはしたる　連理の心　夕霧女二宮にいひよせ給ふにや
ことならはならしの枝にならさなん
いふあはせて夕霧のならしの枝よりさかんといふ心にや
かへりてならしの枝はもりの神は柏木は誰
女房の返しまをすよく
しかるに葉守の神はいますかはしけれとも
かくてよめる心そあれ
ことのはをみつから
ましてとふにはまさるへきにや

もとハ六しろう西ノ大臣なり 柏木の衛門の弟としけるを云て
それより[illegible]かくれ給ふ 按察大納言 [illegible] 左大臣 伸[illegible] 是一
こと人なりけるにて [illegible]しこと縁て[illegible]
けるを[illegible]をはしめて [illegible]の[illegible]なりし[illegible] 木なり
おほかた左大臣也し 柏木ノ[illegible]なりしけると云て
それおりしたくノおとゝ [illegible]の[illegible]女三宮にいとこ之
[illegible]のとなりて 夕霧の弟[illegible]けしと[illegible]のき[illegible]之
なさけひすゝし 夕霧の[illegible]
これ[illegible]つきしろふり 女三の宮の女房 夕霧にあつかひ之
うち[illegible]しかねの[illegible] 女三ノ宮より 夕霧をもち[illegible]けよ
紅ハあさかほ[illegible]しといはひ[illegible]之
あさかほ[illegible]紅[illegible]に[illegible]もしけ[illegible]ゑもんハあさしし之

[illegible]中をとり四見[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ夕霧[illegible]の[illegible]そしそろく
此事それさうてし 女三宮ノを夕霧の子にてうつしより[illegible]
ゆしき[illegible]あ[illegible]の[illegible]てより[illegible]ひ[illegible]し
[illegible]にいつ[illegible]かれし 柏木へ[illegible] 夕霧[illegible]
[illegible]な[illegible]とく 夕霧のみく
[illegible]いとし 夕霧の[illegible] 女三宮ハ柏木の[illegible]
これ[illegible]あしきと之
[illegible]よりしかるめからもの不足なるにりて[illegible]
[illegible]それ[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]世に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]廿[illegible]

柿本と[illegible]

[illegible]小大書之

[illegible]一説柿本[illegible]式[illegible]

[illegible]廿三[illegible]廿三[illegible]

右将軍[illegible]墓草初秋[illegible]

[illegible]天与善人吾[illegible]不信[illegible]

[illegible]此詩[illegible]時平[illegible]男保忠大将[illegible]

右[illegible]将軍[illegible]

[illegible]

右近衛大将藤原朝臣保忠[illegible]承平六年七月十四日薨四十七[illegible]

八条大将時平公一男本朝鳳笙元始[illegible]保忠事[illegible]

[illegible]

[illegible]事[illegible]世中に[illegible]

[illegible]

[illegible]柿本[illegible]

[illegible]

[illegible]柿本の事[illegible]

[illegible]柿本[illegible]

[illegible]柿本の[illegible]

[illegible]

はかなくて　かくおもひの歳のゆくへ　巻中の歌を詞
そのうちにとりなり

柏木終

横笛 廿二 以詞為巻名 詞に大将に笛をつたへ給ふ 源氏四十九歳の
年の二歳也 於此よこ笛のこゑにかはらぬ むなしくなりし
柏木の事 柏木の事 罕人乃 秋 其 の 事 ある 也
ある所の 年比 きこえ 秋 そ の 事 なと 年 の 巻 第八 也
白文 三歳 と あり 第 廿 は 巻 に 横笛 と いふ 也 巻 八 と 号 之 第八 巻 字

放権大納言し 悲 嘆 せる ことの おほ せ と 之
世 を はやう なりし 人 の し 給 し 乃 はかなく 大 方 も なき 人 と 云 人 たち 也
すこし 竹 と 況 柏木乃 事 なと 之
いかなりし 女三宮 入道 の 事 之
かくて こそ おもし 悲 嘆 の 一周忌 六月 八 源氏 の 忌 日 之
いさけなけ あり ける し 薫 の 事 之 二歳 之
二十 の 一百 事
ことの 一百 そ 薫 之 たる の ある 柏木 の 源 善 別

せらるゝ也、一、歌部ニ記天暦十一年三月十八日四天王経供養結願ニ
布施砂金一両　柏木の女
たまひて花をそれし給之　ありし柏木の筆
いかにかとそれし　女ニ若尼ニ如し之　（蓮）花生かん
きこえて後より　菩薩院より女ニ之
たてまつりし　第八まつりしもあるへし　寿泉上人遊覧菩薩山
遊寂　文集　逆葬未細鳴鳳管　盤根纔點臥龍文　朗詠
冷泉院へたてまつりて世の後冷泉院の御製
世中はかなくもなる冷泉の子は猶つむ寺をさしまいらせて
冷泉院御製
寺へなる竹のよはひも世にまかせ世もみえとも
思ひなとし　まだ知らず　女ありとよ見えつかひとみ　聖喜

春の野にいとはふかきかな　君
春の野にあさりてありけれは世に花のあひ
古き乃歌山に　女房への之歌の頭之
世をのかれし　菩薩院と女ニと云ふ　善行の子に給ふ　女一蓮
記生の大路　前のあとこの御事　今は道ニ六道菩薩
別所の田知に極楽乃事を求め世にまかせし
いかにもてたまひし　法花より寺那羅の道ありし
いさめ所見之寺　極楽へ入てまきにきりて
くにの花ふきそありまする
御乃いそかしく女房にへ　おくられしとて　女
今は思ひし果子橋子和泉
のちのまゐり　内宗

漆於ハ黒漆螺鈿様々之蒔絵なとを今ハなくて蔵寺
鉄納之宿　一説ニ名所ニ侍る下ニまつ名とある之
大ありきをとをくとそれなりてもありあかる之
三代のあすみのし三の親王ハ人のまゝに内ニ在ほとハ
きこ侍るおほすきし氏ハ朱雀のんれ
ありて九代のなりし院の御之女三の宮の御子ときある
宮を朱雀院にたまハりけんとのしき也
せられけるし三より朱雀院の御時之
かきくハ宮つかへし三の宮の下くさに流し乃左京にあらそ
ひしところひのみや　そのいとくろみけ紅にてすきこ
ら氏ハさしかりきお女一の宮をえそ一のこしつらはゝる
かくそなかくさんは年の也　栗兄色卸記とあり

ひかりなりけりとくるしきかしこ世をもしさ行々に
来るとうをつれくきしに也
ありそ年すゝめし寧院を都行に入事を根行也　解
ひかり給ふに涼の女三を兄姉后也
ときかハ宮かし女三の尼と為行を涼の命ニこそ也
にを先君へ入し涼の知く思給ふ也
かの物かの三宮しやし唐小文にすかの物に彩とくあるや
やその上よき絵に唐の三宮をうたえのさらり物きさく
ゆきこの代より名を此事に
うちの給ふし小人をうらみ行人さうしくはたなる也
つかちの世かしりてつこうろハ去給ひきそてまくれれさけり
たくきてつるゝ也

柳をうつしゝ楊柳と見えて、鴨の羽かひも花をあ
ツキ 弁
とさゝかへしそへ（さり） 云ふ所をまろのうへとも同し 是のいろ 何處眉 其の和の法也
雉はいとしなりて、柳下に似るよしなかせて柳下に花ぞさく
わりし色也涙しの心
誰も〳〵世にも人々涙ぞるとや
我しみのし涙のもろ人の似の言に涙しの見ぬ迄 何
北に乱く あゐしかりやし涙しの涙迄よりなまとそり
女神しやあしきれま迄汚れなきさき人に心を
おりしゆりをゆくるや
紀いろき所し涙しの手なとはくき所迄節したる人とい
まさ見ゆとなへ
いまたり、いと言ひ人し手のなくしくまつ所へい女をく

のこはまやましみ我もしらやゆし所いえ事の今よりまる
しまうへ
女房神し所めりし明石出服みてるを惜ますも 弁
おりゆ見しろしまたくのくとけいふりも〳〵なりなりと
深しの心 ふまた柏木の…べきよりそやのまとの心し
見もそんと思ひし深しのかりなまも嫁人まれしいきまいしと
花のさかり〳〵年をた花のさかりあかすあとめひと人とい斧
ちりくりいさいれさきはやまて見さかりいあかまれ天命の 汝の
いのとかくつきよしと口をそうて涙迄柏木の春まゝ女房のしまし涙
いはのすかへへいかなきより
うつ楼のしさし涙し乃あひえ人事をさとし心にと人て只
くましし

若くしもうらいしもたらちからぬ人にかりの家のらしとなるつくに
鴬なくもの(かやけれ)かりしき花よりハつらきへし
いと柏木をうらし首乃若菜の事をいふ又若菜の事まてすゝ
と云ハ重葉のうち源氏也乃事をもうらし花源氏若菜の事也
柏木をうらいぬらしへ吊 柏木もおもうにき源氏の
うちふしもうらし柏木の事也竹のこいかう老の事也 花
ふるきをうらし若菜ハきつれかうつりしへ
川も何かし人竹の子のうつりて若せよと世といふはや
かくもうらてし第也とうちうち竹也又若菜とハひこしともなり
明日ねもとえさしかりて人のへ
はうきうつし柏木のきてとりうてとゆく源氏のなり
のはいの人に對してへ

さえなしてつもりの若菜花もてなし柏の家のうらかうき事つし
あつらむかなしもとゆくなくしとして源氏の落足の事やさ
さなえしもちのうし給を代けしうへそなき事とも思し
へさえて若菜しこく足手にし柏木の夕も是
もちかしつゝし柏木女三の宮の罪へ吊 一統若えこ事
今の上のちかなし柏木夕霧への遺言也
いときこし由あらし夕霧の思ひ人柏木の事とをかて
けもとつしいひかしうちとぬらり
かの人のあるかりし柏木の思ひいし今く夕霧の心
一あかれたをとし夕霧か若れ落見かう思ひかりける
さちとけ若かやうふし一条の宮のていさ

みくにぶりやまとことにもせよくもりなきひかりとぞなる
清る人ぞ琴となるとぞ詠くうへ見ゆるは新
わが国の琴の一しも多くあるは三乗王の事へ見えたり万葉集　万葉
雪丸の居ノ以ハラニ押手ナシ赤キシノ丢フへ
むしの音にけさーあやうく一むしのくさむしの音に見けるを詠人
とくけむさるふ　おのまつい虫の音をしく秋おもひやらるるこゝろ

明石の思へし

和琴をもとむるは一名寄のをえ見あらしともきこえ侍
あらはきこえらるくし律の音すらはやまくるまり
をきなあるへいし名寄乃家へあるふまえ用心あるへきの物也
されはまたうりまくとその声すいあり
故気のさうし柏木の子なれしをこえたとこに名寄の祖也

おもしきは一柏木の琴の引し年とは名寄の名を詠へ
あるかはまあるうし柏木の衣をもし琴ての音も年や
ささはこまもし柏木の名あるもし琴とあるいこれてはらく女三のあそ
してきらせらるらしまて声も抽とそと柏木乃ゆかりの名をまさ
これらんとへ　此琴うるし女三の家乃御琴すそ伯牙あり
琴の意などいふしはまりしし鬼女の琴をたくかしはやといふ絃絶の
ゆへ柏木死てはこの琴をも引ことなし
列子伯牙鼓琴志在高山鍾子期云善哉峩々若太山志在流水
曰洋々若江河及期死伯牙遂絶絃不復鼓琴痛知音永
絶ス　伯牙と云者ハ琴の上手也期といふ者琴の音を朝しる
伯牙音を知る者なしとて絃を断てはなれたり

と云事也これ 始く 前栽なとハ世の人と夕霧尸に夜軒一曲
のゆ思ひの御事に琴ハ引かしまてたゝあそひハしとて給ふなと
云たけし古事を今その御前く 末摘花の御むかしれの事ハ今ハ
あそひハ引事ハ物ハ世にしかし見て古事の事ハあそひ
の事たちて也 一隅にも川なと字と云川なきなと世事ハ古今
にありて古今のあはれハ事にて左右よ者のかたに 今あそひく
世そ物のなきなとたかし月日にめくりあひ行 [illegible]
女宮てもつかし女二宮ものをきなよりもいひてとて嘆
末摘花の琴竹にしとて [illegible]
世の中のきかしかしの世の中に事をこれてよむ あそひにかゝりそさて
なきまよくなされ世もなつまし おもひみたれさまもの
こゝろそへ和琴をことをたてもてと柏木の事をおもひてしたて物の
書よりれハ琴なと手を弾うく あそひと又女二宮も事に [illegible]
ことたちをもの 夕霧の御せの女二宮の御方をまいりともなひあらふ
八宮と物をそはにかゝりそに [illegible] あそひに ものかたり
あかたなりし世ハ物をきとをも事てなけれは物をし 夕霧ハ女二
柏木物柏木の事をおもひやれ下まて女二宮も事をおもひて嘆
琴をハかやうし夕霧の琴をこしやり給ひ
みなれものし此事あそひ物事をも夕霧と柏木と
気むて事をもりて琴の音をさてよく御あそひそそ
事ものにてしをもこゝろに 夕霧に琴引給ひて女二宮の御
あそひもなく 我事とも
忍ひをそこし 如聴仙楽耳暫明 琵琶行
事にこゝろのとし和琴のをす二絃をひ 柏木より女二宮へつたはる

へうたひもてうちいり人と云尚もりそハ妹の丈のかなといひなされ
言ふかけり夕霧心之柏木の北の方の琴をひき給ひしせんとは
思ひそめられハ女宮てもちておもふとて面白の便く
月さし入て女二の宮琴ハ宮にひき給ふなかなへく
聊不乱行て心之寺 秋風なつかしく吹まかせ宮
不思議に思ひ夕霧のさて引ん女二の宮夕霧を思
付女 風ハさむく〳〵吹さむく風は秋といひ付たり
我おもふ妹のかたとりもせまし
きのおそ女二の宮引給ふ王うんを行のとかれかれを
引給ひし筆を引給へ或説に柏木の宮の
しをむ ひさし こゝ 門給ひ ひたらと
此の説ハ少ふ夕霧の想夫恋を引給ふ 辛酉

想ひつゝよむなるか夕霧卑下の詞の思ひをよむといひたり
想夫恋を引て聞へ給ふ女二宮は心にて給ふ
ハこたへ此曲を思こそよりや事なく給ふ
て引給ふと之説
まして御前にて柏木の事を給ふを引給ひて
さよ更ていとおもしろく夕霧ハ事にふれて琴を
引給ふ人はさとり給ふと想夫恋の事ハいとおもしろけ
れはいふにハいとねのうちにしめ給ふ
引給ふ琴をよく人はさとりかなといふ事をさとり
御琴を人に給ひ給ふにいへはいふなさ
ふといへてさを聞給ひて一引給ハまた御の引給へ
御ハ給ひて世のこと給ふ 宮て琴をよくおもふなる

来てよをと[illegible]世[illegible]なきこうれ[illegible]のあつてなりて
うつろ[illegible]花
[illegible]秋の[illegible]と秋の[illegible]
[illegible]ふは[illegible]
[illegible]花を[illegible]今[illegible]の[illegible]
[illegible]に[illegible]を[illegible]花[illegible]の[illegible]は[illegible]
風しなりや云よそいつれ[illegible]
何もそれるしとく[illegible]
柏の[illegible]第八[illegible]に[illegible]柏なるく
[illegible]の花も柏木の[illegible]
[illegible]おもし[illegible]もおもし[illegible]
[illegible]花[illegible]一[illegible]花[illegible]

[illegible]世上の花柏の[illegible]女房[illegible]
花とくし[illegible]女房[illegible]
なれ[illegible]
柏木[illegible]女房[illegible]柏木の[illegible]
[illegible]女房[illegible]
[illegible]女房の[illegible]
[illegible]
世上の[illegible]
[illegible]
よみかけし女房の思を[illegible]
このいひは[illegible]女房[illegible]今[illegible]の面白さ
に[illegible]女房[illegible]の[illegible]

琵琶ハ[illegible]

胡[illegible]琴[illegible]縁[illegible]胡[illegible]

四[illegible]胡[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]文[illegible]

花[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

向秀過山陽旧居思嵆康呂安隣人吹笛作思旧賦 向秀

嵆康か友也 文選思旧賦 今ヲ感シ[illegible]旧ヲ思[illegible]

かのよしみ[illegible]文[illegible]遊[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]胡[illegible]随[illegible]

[illegible]胡之 巴[illegible]

[illegible]柳木の[illegible]笛と[illegible]胡

[illegible]柳木の[illegible]胡[illegible]

[illegible]

遊ひにはふえをさしたりし柏木かのおもかけしとそ
えんしきそへ侍り漢書に云李延年竹之文選詩賦を云楽をあり
これはかくしきおなりきこえのんくいふ叶
笛を云ふ也柏木を見まつりて和琴引し事ありておもひ出し此笛
をみえん事いかなくくえ
笛をもけて夜ふかし弄せし貝吹者のやうな笛の音を吹すへき也
事よみされて音を見せし也源氏かすめてお侍る事とそ
此ゆよもかれし作り　文選笛賦云蜂聚蟻同衆音猥積
五花　猥積　夕霧の笛の音柏木まかくれとこのみ
かりのよりこゑのゑのち
よこゑのこゑへし云　横笛調子盤渉　国史云仁明天皇承和元
年正月辛未内宴授是夕初授正六位上大戸首清

上外従五位下清上能吹横笛故預是賞今案横笛二字出処
也むかしの笛の名は調子の名より出たりしとて
かしとは柏木の事此笛をすへし夕霧に給はるもとあり
そのくふし夕霧の父女二の宮の御事之
なよみかりし夕霧は此前の事にて三条宮也
此宮よんかけし女二の宮は夕霧にはなれけちかき宮の女房あて
かくむへ此方やうきれし宮の井房のかた
まとあれとしゆかしむあれともよろこはしきれたる事
たゝやかまさるかりや花色さかりや催馬楽我家と云ふ
いつもにさふ催馬楽云我家今の御方のかた女房所
云おきしつかうやや我家
思ぬ男もありけり我家

此段ハ同し事ハいふにおよハす我らもおもひしらるゝ御事にや
見こし給はんハ一条宮の御さま夕霧のおもひよりしこゝろなりしとかや
さえてくるしき給ふへし
夜すからのいさよひ一条宮の御有様
ありさまをのへ一条院の御事なり
此御後のこと女二宮すさまし給ふ笛の
御事ハ朝なんし夕霧の一条宮のさまをしのひ
いたハしき事柏木の御かたみ柏木の女二宮の御
此うちにもかたみのこともあはれに給ふ
見給ふ女二の宮御ふみ柏木のものかたりしく
とかく御心すさめかはし給ふ
こよひかなしへし

おもひつゝくるにもかなしく事ハかきりなくおほえ給ふ
ゆめにもけしき見え給
かの御のこと一条宮よりの御文の事
ありさましたまへしにもけしきおかしき御事にてあり
ならひ給ふ御かたへまいらせ給ふにおほえ給ふ
（ことつて）花
おもひ給ふハ夕霧の宮のをんな女のおもひにハ此御ことのこゝろへよむ
宮の御おもひよりて後のことなり云々
此花の夕霧の笛柏木の御ことをおもふ
まもりたまふ夕霧の
笛ハ此御わたくしの柏木の笛にはあらぬにや
こまかに御事ハ夕霧の御調の御かたみの事

花のちるを散佛からしむかたより佛が成と也来世ねかひぬるとい
蓮の台(御人之此成也)念にむかふ之輩千の縁にひかれ
風とゆふめり
称ふるとなし花帝に女三宮の事とあり主緑が
おさへ心ニミし 硯吐 枕もとに乳をあさく事
大念を称ふのあかし云弁府をさへ花付と之
君とだきミミ紫とみまてさてミ方斯之中し斯之
そら念にておひし云弁府の主の気をすへ花付へ
しらとおもてし云弁此事之
御のハむかふへし乳のむぬ事之それとくやてのみ気ぬとすく
さめ斯へ云方れてまさいある人 男気し夕霧之
それまで称し柏木の事に深事いくすたり之

女三宮のし少まや御の親人にあらせて御へ夕霧の親之
おまての分らし夕霧此陸云弁府の女北生子にあれてたふるミ
年とおもしとし花そ経籍し夕霧に花の事に念にかゆ念ミ
み府斯親人事の人の事のいてとえらし有事によき斯府のめんて
夕霧の事とをそてたらしさにたミ云斯而
なけとてならまてらりし事に頼之方生柏木の事のま乗り
しし為なけ何にあらしとぞ能

此く今彼にし我の(此斉云)のぞらん事をれをしと
并御にのらりし世ミ文より夕霧此佛経之
いり思へらし柏木の分ん夕霧のあし
一解念し囀給一念生處是庭 経文河
柏木のそりいて夕霧をせるあき貴足集云

帯刀かくて人にかりて常花公の息世にすぐれて時の朝臣
殊にすぐれたる人よみ出でたりける歌も多かりけれ
むかしくからまり給ふ時は御遊など有りし月の宴ありける
この世にあるかぎりはせぬ事もせねばならぬまゝせぬ者ぞ
八の宮おはしまして琴弾きけるなり御心也より給ひて
さなきは伝へ給ひて後うちうちにやなど御心とぞ
かの人にもあなる御殺仕官のなくて大将まではなりしに
花散里にて候ひし

仏の道より始めて仏のもし康保四年七月村上天皇崩御野
宮殿修す諷誦和琴横笛等為眼伝布施者に修す諷誦
尊云有一龍笛蓋帝代名物也と云々紀
龍笛ハ名きこえたる名あれども入かの名物こそよくよくよき事にと云
御前の物なりし明石中宮の御かたに御氏名おりし御はかしと文字

人は笛を吹きてありけるうちに御笛の事を
三宮にし給ふにさるよしに此笛は世に名高き笛なれば三の宮をして
横笛にし給ひし此宮をして白露は此笛をとりて三の宮の中将一段と
給ふ夕霧にし給ふ夕霧をよそにその御笛をうけとりてかの人とも
三の宮の秋をきこしめさるにこの御笛をもとめ給ふことかぎりなき
とはいへ三宮のこと思ひしこそありけれの大将前の此笛共乃
少将に成りしのおりしもすべてなきと云ふ所　大将八宮の文
四の宮をおかし御笛ありしを見て
ねがはくはもらえし文のおもむきし給ふかの入れ置かれたるにて三宮の御
をかし給へ紀　おりしも夕霧の御
大将殿へもおはしし御笛上見の方の中へ一番ノ所
はじめの給ひし　夕霧の御前へ御消息し給ふことの御返事

うつくしげにて侍る

いかなるくさんし大将の[illegible]人の見ぬやうに[illegible]

ごとくにまもらい女四の宮の事也

[illegible]二条院[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]

[illegible]源氏の[illegible]

[illegible]

[illegible]近衛の大将之随身を近衛の将監

[illegible]随身とを河

[illegible]三歳の[illegible]いさゝか申[illegible]

[illegible]二[illegible]蔵[illegible]若葉巻[illegible]

源氏四十の賀の[illegible]生[illegible]

[illegible]源氏の[illegible]

[illegible]源氏の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]

[illegible]柏木[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]源氏の[illegible]

[illegible]源氏の[illegible]柏木の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

未なかりけれはゆるしたまはりとし同しなりの三条の宮にての事也おもておもてし
三の宮は此女二の宮の御ことをいはまほしくおほしてちかくなし給へる
衛門督の人々かたらひて小侍従の局にてものいひかはしたまふか
則いへるれはなんひとつきこえたまひけるかたみの事なりや
二の宮は表にあはせ給へり女三の宮のかたみとおほしめしなし給へ
のこしおきたまへるをいはさりきとて柏木卿のゆかりとて云々　同
柏木なくなりての三年をなかき卿といふ事なりとて云々
なすらへ給ひし夕霧のおほえをまたく柏木の事をおもひ給へ
まかなたりし見たてまつりわ柏木の御ことを夕霧ハ
おほしめしたり柏木の目つきに似たるを云々まことにさもあらんかし
かくして
いふかしきことのはの事を夕霧の君にかくしおきてさなからいはれしや

柏木を似たるかなとて
おほくいひすくし夕霧の心にて柏木の似たるとおもひける
うし給ひて八二の宮のありさまにつけても思ひかへしのたまへ
かうかへりみ給ひてかゝる柏木の子とはしらすしてこのたまへ
ちかくおはしますほとに柏木の父の柏木のかたみを見るにつけての
給ふよしを夕霧のさまにおもひやられて
そのかくにし夕霧はいはれけるとて
あらしとて
一説云柏木の子をかくしたるを夕霧のしれるやうにいへり
さやうにし宮の宇治のくたりにて夕霧の柏木の事をかたるなり
よはのこゝろし思ひかへす夕霧のこゝろをおもひやる
そのよしこゝろえおくへきにや
たゝしかくの事よりほかのことは云々
柏木の事也

[illegible] 女房の事 [illegible]

[illegible] 一首 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 女房の事 [illegible]

[illegible] 女房 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 女房 [illegible]

[illegible]

[illegible] 女房の [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 女房 [illegible]

[illegible] 女房 [illegible]

さて実かへりけるとさうらへとけ給はりしと給へ
おほえかたく云々まさしに申事よりかの川の外れ柳
木の葉のよみてし事をかきそへたる文章也
此ことに柳もの〳〵の柳木の事けつて也せてやう給
文の女言葉をとりて表のんへ
也の時分しのはるゝまてかゝれてはかりの事

して柳木の事とかなれ
貞信公の兄ト貞保親王ハ清和の第九の皇子
後三條院の御子也と云兵部卿
なれはここにおもひけれとの給へし
よりの三月朱雀院の御時の時也給ひと
かやうの事也桃園式部卿

貞保親王とうけたまはりし此御時は
三代御門後三條院桃園相違也桃園兵部卿
ある
桃園寛平親王とせしと
也しも一條の御事ともえさせ給ふ
此の道しへはかねて柳の事ともかう
と思ひ給ひて覚えの事は伺ひて
かの文章の事とも
とのゝかゝれへしよりの文章の事
いかにしてあはれなりと思ひけるを
おかしく柳木の事をかい
さりとてせし柳木の事文字の詞

先つ人々ハ心々也しー　柿本の人丸ハ中納言の事也

其代よりし源氏の物語の文屋ハ心ミと柿本の事と見えたり

心のと思ふ所なり私也

柿本人麿の事ハ源氏の物語の事を文屋ハ何の事ハ心見

れと別の事にも見えたり私也

源氏の物語の心ハ色々こと事のたゝ心見え

のわさき事ハおもひきする式部の文屋の心とそ見え

かの哉ハおもひかたり源氏の詞柿本の事也

者の詞て文屋の詞の事きこえてはいかで

也喜撰事心あるハおもひも見えたり私也

まつてすミし事を取りてすく心ありて

又御と

總頁人心　夜夢不頒　心許　何　けれハ

こゝにておもひの文屋の夢を取りて物也　私

もかりてきこてし文屋ハ柿本の心にてを源氏の

中にいひておもひすゝむ心のつゐた

むらしゆうきう　式部か作と思しき也　私

穪留取抄

並 鈴虫

巻名は詞と哥とによりて号す 此巻並之横笛ノ巻は源氏君四十

九歳の秋まてのことあり 此巻は五十歳の夏より秋まて

のことなり 又号歟 大かたの秋をはうしとしりにしをふりすてかた

き鈴虫の声 鈴虫のふり出てなく詞節作てあり 詞を

ゑらひてすのなし 六条院の尊(御)

入道の御事ゝ 女三宮也

このゑいわかれ源しめのゝやうなく女三之宮をあるゝ所ゝ

内にまてはありけくはあるてして三の宮也

なるまゝりもとせし 源氏のまされたるらそらえて弥陀仏の御堂の

らいたせ給ふ 絵之やそてゝれ念誦堂の具足まてかくさるを

宮いみくかたてられさすあひくゝ山ゝ仏供養れまさり用れそろくし

以ノ字宝五(?)月ニ仕ヌるゆゑに

四之二 [illegible]

[illegible] 天蓋 [illegible]のことし

[illegible] 錦 覆 繝 文紗 目潔之 河 錦 [illegible] 体

[illegible] 机 [illegible]

目 [illegible] 一 [illegible] の [illegible] 白 [illegible]

[illegible] の [illegible] 佛 [illegible]

[illegible] 帳 [illegible]

[illegible] の [illegible]

[illegible] の [illegible]

羅 [illegible] 一間 [illegible]

の [illegible] 仏 [illegible]

[illegible] 迦 [illegible]

用 [illegible] 迦 [illegible]

[illegible] 唐の [illegible] 唐方 用 [illegible]

[illegible] 薫

[illegible] の [illegible] 名香 佛 [illegible]

[illegible] 脇之 [illegible] 釈 [illegible] 勢至 [illegible] 脇侍

観 [illegible] 無量寿佛 住 [illegible] 空中 観世音 大勢至 是 [illegible] 二大士 侍

[illegible] 左右 [illegible] 二大士 脇侍 [illegible]

[illegible]

[illegible] 親 [illegible] 又 [illegible] の [illegible]

[illegible] 荷 [illegible] の [illegible]

[illegible] の [illegible] 錦 [illegible]

[illegible]

ろをとりかへしかはりいかくし　御堂をとりめくりて捧香めとくにさゝけて
かひきそへかゝりくをしくさき宝ハ宝にちりかゝる　紙さまつ
香よのかをしてるのゆすかりめくる
ゆくかりまし　名香のほのかなるかをりあひたる
ありつる此御経は　せこれ御経の服氏のわすてとすく
天暦九年正月四日村上天皇為母后被供養宸筆法
花経有八講
ふりそこに海のし女房は皆此世のゆめみるうすく如行経
たゝひとさ等し　惣して女房何此世の栄ゆすまる
ゆる御経し　女人のことにさふへき御事
人やおほしてし此経のうちにかく金紙をかきてほくゝ
まへ此ひひかけ御經ハ女人御まへ

きしけんしくもうつくしくおも
すくしかさし　此にのくてかゝりけるとらいかる筆也
ちんのくえつくし　ゆゝしき事と今もおもふこさいしは
よろつの物にてくれて　木の葉一ツは空とみえて
くれなゐ　吉とき見えいかにもかしこく見ゆる仏壇
ゑかきのそうる花に流そてとりなしや或高き壇にて
経の御つくゑにいのつくりし此帳台の上に仏をおかれしく
経の机をすへり　御経を奉る
ごかんなる人〻行道の人〻経よかしわすれ人
あるよ　紙の香でかく昇　女人もなを
うけ　後人はかり
流しおなくにしてゝ　源氏の道場へ紛まへ

女三宮とのたまふ所に、なけきをかへし袖を云ふ也　ここち
源氏　女三宮の事也　女三の宮の人になりゆく
にならむ也　まことは　心苦しかり
清らなる所に　源氏の女たちの所にあらゆる
まことに源氏の詞　さりともこれのみすかいつくしとて経を
こまかに見給ふに　みな経のやうに懐あるかなと
朝夕の講読たまはりて清らかにつゝましきに言はすまし
少いの御かたし　女三宮のみやの人々のかたへ
源氏の人々にもあはれなることを所々しき源氏の見
源氏殊なれきくの縁く
見もてしつかりておもはれ　源氏
まさりみるに　小倉とのかた　小帝のやさし障子

言ふ心にもなき女三宮の人々に源氏のいひをもてはやしける事也　仏の事
そのみちのことに心あれは念誦する事と言ひ分けて
お前にはおかしき女三宮のおなしく行ひをもつ経
乃中にも源氏のしりめ
如何におはしまし世とのことはりを教ふるに法花経
言ひもてゆかれしを源氏は年老たれは世をのかれ
をとこは女三宮の御ためにも思はれ
かの花の中のした池中花盡満花く惣是往生人各留
半座乗花葉待我闍浮同行人　五會讃　河
見るも一蓮のまへもうちに女三宮の御ための
極楽の縁にあはれなるにもおはしまし
女ちかひとなしつる源氏も世と御かたの縁に別

[illegible]
いざ家のうちへ
おもしろや[illegible]尼ぞ[illegible]扇[illegible]の[illegible]扇[illegible]
なにとても昔の女の御姿[illegible]目のあたり[illegible]見る[illegible]
御姿[illegible]一筆山[illegible]すゝ[illegible]御心[illegible]
この世[illegible]並[illegible]すゝ[illegible]のは[illegible]
そめつしき詞[illegible]
ふりし[illegible]御身の女[illegible]すゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]
われあまりに[illegible]御の[illegible]女[illegible]
[illegible]すて[illegible]
[illegible]布施のため 論師 読師 呪願

散花 唄 堂達[illegible]
あやなくも あやしや[illegible]けさ[illegible]
[illegible]のめぐりや[illegible]みなの[illegible]
[illegible] 双[illegible]詞[illegible]
[illegible]世[illegible]論[illegible]の[illegible]すゝ[illegible]
[illegible]さ[illegible]
[illegible]堂[illegible]
[illegible]
[illegible]増[illegible]
[illegible]来[illegible]の[illegible]
[illegible]詞[illegible]
の[illegible]

[illegible]

源氏の[illegible]女三[illegible]

[illegible]朱雀院の[illegible]

[illegible]

[illegible]女三宮[illegible]

[illegible]

源氏の[illegible]朱雀院[illegible]

[illegible]朱雀院[illegible]

[illegible]女三宮の[illegible]

[illegible]

[illegible]女三宮の[illegible]

[illegible]八月十五夜[illegible]

[illegible]

あまりにおもふこころしつし

雲いちろしと秋ならいの野らてのやうはいすかれし

いかれそてそーれいおしくしらう放ちせさ侍きこし

こちきてくすくつきにさやめかいかしく

んきらめ 松虫ハ人を待ちて秋くる人なきに源氏

ちうらに秋の女こ事の名をかはるこめてくこ

あかの秋をえし也こ事太とそ秋いう月の声をやすく九れいろ

え物にほそうしき一秋をよはうき名をしひする

宗祇しのはしの句也かる源氏の物名をそ仏也

いまさやしあかめてる詞也いそ松虫のおのすからは秋とう

しし様のかいこそもたてさし此内をちかへしろ

ちかかすつし源氏の御詞也

たくさそしいおみーしかもて空は女三の宮よそふらおもかれ

いらふいは世はをれにふ色も源氏もひ行て三条

宮ふくうつ行きもと思給也すゝ虫ハ女三の宮をと

てくれあかれは心をし

めくしく見えさし源氏の詞也

ゆれてはおもふろし琴をは行くくかおもふろかよそは

れもたれなれし行とそ女三の宮をは行すにくし

月さし出る夕の詞と月いはさく新くしてる

さめいさをて宮ハのり見し源氏の心く

もとふかくしてあそれし者甚声楽

所あそ衣ハ紙アやみかくる

ちかのいゆーし

こよひは[illegible]思ひ出[illegible]

[illegible]　いと〳〵清[illegible]のけふ[illegible]く清[illegible]　御前の御あそひ[illegible]六条院

[illegible]に[illegible]ことに[illegible]

[illegible]まかてゝさふらひ給ふ六条院へ人々まゐりて

むかしの[illegible]いつも御心[illegible]すく

いつとても源氏の説　いつとても月見ぬ秋はなけれ

てらす月のあつし[illegible]

こよひの[illegible]三五夜中新月色二千里外故人心　楽天

今宵の[illegible]月の[illegible]十五夜の[illegible]に[illegible]詩也

て二千里のおもひ[illegible]をも[illegible]世のいまも[illegible]

[illegible]の月[illegible]のこゝろすこしそれと

式部大輔　私　柏木の時にあらはすなと前にくはし

とうさらし[illegible]

身つからも御琴の[illegible]

わか宿[illegible]其声悲くていふこゝろ時節相叶る

そ[illegible]とすこしうち[illegible]

かゝるよのうらみは女三宮柏木の事と思ひやりて

かゝるよのはかなし[illegible]遊恨あり[illegible]

うちすて給ひし宮は柏木を[illegible]めやきらしき

こゝろめて[illegible]

[illegible]　左大弁ハ柏木の弟紅梅大臣之[illegible]式部大輔[illegible]

[illegible]給[illegible]世[illegible]て[illegible]

[illegible]

あまりにも月に　院にて　冷泉院へまうで
ておはしまして　歎き給ふくにさまぐ～やう
すぐれさせ給ふ人なれはやかて源氏の御心我かたにひき入
何事につけても冷泉院の御ために細かにかたらひ
させ給ふ事にしも
いかばかりよろこばしと思すらん源氏のまことは院へまいらせ給ふ
月をみてあかしのおほしたる源氏の冷泉院への思ひいで同じ雲居に関書
と仰られける内侍の御位とさらの人同じ物か見と云心ともかくや
我宿もはやうつりしの御身の時の有りさま昔よりかわらむと思ふ中本下に
引　色をわかの月をそえしれ我宿もみ給ふるかなし
こゝろにかなひ奉りし古代の秋則之奴婢之一流深甚ふかくにた
源氏のをりしも冷泉院こそしかみたまひて

人々の御車よりさきに立つて六条院へまかりけり人々御車
院へ御車をみてし源氏の御車を并ひにて同車し
大殿ハ夕霧
大殿しに左大臣も東宮大夫　君達殺子　又宰相
ありかけり人しれず
おもくほかしを　源氏の下ル
道にて下ルとくゝりつけして着給ふ
心あるかな車のうちにて六条院より冷泉院への御うちにて
こゝろかをみ給へし源氏の御かけにむかう冷泉院御座のことにて六条院へ
行幸あるしけるに
弟にさるゝひとのさいの御進のうちにきこえけるに
のよくは　ひとへにやうにかくして
冷泉院

なくさめかねつゝ

うらやましく　[illegible]のかなしく

[illegible]かなしさをもおほさるゝ

こゝのつのしなに冷泉院と聞えし[illegible]

なき[illegible]の御すゝみの御[illegible]ありしの御ことを

[illegible]くて冷泉院にも御かはしてゆかしうおほす

中宮の御ためにとて秋好中宮に[illegible]御ゆるしありし冷泉院

[illegible]中宮のおほすとて御[illegible]あるいは[illegible]

中宮の御読経

[illegible]

権大納言[illegible]　醍月[illegible]　廿[illegible]

秋くさ[illegible]なりけり

なほ世をそむきなまほしくおほしてれのこと

世をおほしすてたる源氏の世をそむきたまふこと

御ありさまにもいとはしき御こゝろありかたき中宮の御ものがたり

なき人の御ことをおほしいてゝ中宮へ御[illegible]

いかにかわかれ[illegible]のことを中宮のさま[illegible]

御[illegible]中宮の御[illegible]あるまじきをおほして

[illegible]大臣[illegible]御[illegible]の御[illegible]

御息所のおもく[illegible]　[illegible]

かすかなる冷泉院にかへりてや[illegible]中宮

御ほうしなんと

[illegible]

[illegible]

かゝみ給ふ紀伊にさゝく 形見は絶く忍ひ給へとも猶ひかへは
まかれは ふりかへりてそなかめ給ひしとも
ゐなかに帰れる之御すゝ御心のうち 出家の本意を
いひしにわすれて出すしとそ
おほやけ御使にて源氏御文大臣殿へ申してけるとなん
すゝみ給ひて御墨添へて出給ひしと
内心を御覧せさせ給ひ〔或云御返事をも申さす〕 冷泉院のわかき御ゆく末のさた
ていとかひなきもくちをしくひぬ御ことゝ
〔九 文殊にいひし意也〕
御心ならぬはすてかひなく世をそむく〔心は思ひすてゝしとも〕 御けしき見せて
御かたみにすゝ御かへりしわれをとまれとかくおほす
事もなくてくらし過しける御やすみなくいかゝ思しけん
すへらきの御事とも 源氏の御中宮のいて給へる御事
又かくて中宮の御心のうちなからん
宮からも源氏の御ことに思ひしつみすまいに心ゆかす給ひて
ひとへに御心ぬきにしいとしつみたまふ心のうちいふ
なけきをもいひたりし中宮の御心なり中宮と源氏の御こと
よそにも給はねをつゝしみ
前斎宮の御事のしは中宮の御心さへみすゝあたりのいみしき事とも 中宮の
御心のうちを思ひ入給へる 孝行の心なく
〔四 夏冬果子出たす事 或云地獄のありさま〕
なり候けるとも 六条院
一品の宮をひきゐし給ひの御心の御すゝめにて奉らんとおほしたり
うたへの御心はぬる御すみにし 中宮の御物かたりを〔源氏にまいらせ〕
おほやけにもいかにし 物の御出ましかのめて 消息
さて 中宮のいかゝ 御けしきかはらせ給へるを 露にしてあさましく

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]杜[illegible]の[illegible]仏法[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]身のつり[illegible]

[illegible]源氏の詞[illegible]

[illegible]

[illegible]源氏の詞

[illegible]涅槃経曰 亦如朝露勢不久停

貪名利[illegible] 朝露貪名利夕陽[illegible]子[illegible]

[illegible]目[illegible]通[illegible]

[illegible]親[illegible]その[illegible]思[illegible]

[illegible]盂蘭盆経[illegible]盂蘭盆経[illegible]

中間遠殺 生天[illegible]在大焦熱地獄中二経劫[illegible]

[illegible]同[illegible]

[illegible]仏道[illegible]形[illegible]

[illegible]

[illegible]源氏[illegible]の[illegible]

[illegible]源氏[illegible]の詞[illegible]見[illegible]

[illegible]世[illegible]

[illegible]

[illegible]源氏の[illegible]見[illegible]

[illegible]

[illegible]

御ついでに
申すとかや　　　　京極の院には又花山院とも
春宮の女御の　中宮の大将は京極の
いとこなり給ひし冷泉院をことにあはれに
人々はこれを大将殿の跡をつぎ給ふ
流れてつゐに冷泉院の御子に御対面ありしにも
かくあまた御後をきこえ給ひし
中なくもしも中院は六条院とゆかりもなきにて
御身をかくしまして　内裏は御所まつりの時は里居を
ありし仙洞にて里居なとせさせ給ふ
なくなりしも平人のやうにまゐらせ給ひぬる
と申すらし　仙洞のまへに御座ましたれ　あそはしける

何ゆへに御心を　新院万乗の君の御下にかくとも
まして仏の前をまいらせ給ひし後は御世をしろしめす
東の花山院の御母后に申されて御家の御あとを
よろしく御心やすく申すに新院はこれを御覧じ
むかしの中院の文は後の中院より
御子ふかく

　一條

III X
3
30